想定外の陽性 外来休止

南生協病院（名古屋市、313床、職員591人）はその瞬間、新型コロナウイルスの院内感染を防ぐ最前線に立たされた。

2月29日。土曜日の午後5時過ぎ。幹部の会議が終盤を迎えていた。院長の長江浩幸さん(60)の携帯電話に、看護部からメールが入った。△23日に肺炎で入院した70歳代の女性が、PCR検査で陽性▽。愛知県で29人目。女性は重篤で、人工呼吸器を着けている。

感染の拡大を防がなければ。患者と職員を守らなければ。県内初の死亡者を出すことになるかもしれない。長江さんは、瞬時にそんなことを思った。

病院は、感染症指定医療機関ではなく、特別な対策が必要な患者を受け入れる設備はない。感染対策チームは7人。専従の感染管理認定看護師は1人。

手洗いや消毒、防護服着用のルール化など感染の標準予防策は徹底してきた。感染した重症患者が入る場合の想定もした。感染の可能性がある肺炎患者は、全員を病棟の個室に入れる方針も決めた。だが、女性の入院時、その指示は現場に浸透していなかった。

女性は、小規模な福祉施設に入所しており、発熱や嘔吐を訴えて入院した。複数の持病がある。感染者との接触歴はない。肺炎球菌が検出され、肺炎と診断されて4人部屋に入った。

女性のPCR検査について、病院は前日の28日に保健センターに打診したが、結果は「対象外」。この日初めて検査を行い、陽性が確認されたのだ。まさに「想定外」の事態だった。

女性がいた病棟の現場で、看護師たちに緊張が走った。突然、身近に迫った未知のウイルス。何が起きるのか。看護師の一人(36)は「どうか院内感染だけは起きないで」と願った。

幹部会議後、病院と、母体の南医療生活協同組合の幹部十数人が即断した。

女性の病棟で勤務した医師8人と看護師28人ら42人は、自宅待機。8日間、新規入院と外来を休止。入院患者は病棟から出ず、家族との面会も控えてもらう。地域医療への貢献を絶対の使命としてきた病院にとって、苦渋の決断だ。

病院事務長の森善彦さん(51)は「地域と社会へ、正確な情報を発信しなければ」と考えた。午後11時半、病院は記者会見を開いた。

新型コロナウイルスとの闘いが始まった。感染の診断基準も次々と更新されていく。今日正しいことが明日は間違っているかもしれない。そんな刻々と変化する状況のなかで――。

◇

院内感染の防止に挑んだ南生協病院と、それを支えた地域の姿をたどる。

（このシリーズは全6回）

外来の休止を経て再開し、大勢の患者が訪れる南生協病院（4月15日、名古屋市緑区で）＝中根新太郎撮影

＊過去記事はヨミドクターで

連載「医療ルネサンス」は、原則、月曜日から金曜日の掲載です

情報混乱 広がる疑心暗鬼

院内感染の防止に向けて始動した、南生協病院（名古屋市、313床、職員591人）。外部からの入院患者が未知のウイルスに感染している。初めて経験する事態に、情報は錯綜し、伝わり方が乱れ、感染対策の主要メンバーは現場対応に追われた。

3月1日、日曜日。新たに、80歳代と50歳代の女性に新型コロナウイルスの感染が分かった。前日に初めて感染が見つかった70歳代の女性の後、同じ福祉施設から入院した2人だ。入院当初からそれぞれ個室に入っていたが、院内の緊張は一気に高まった。

患者に接する現場は混乱を極めた。感染対策チームのリーダーで副院長の長田芳幸さん(44)は、その〝悲鳴〟に立ち往生した。

もう院内感染が起きているの？　感染者がいるのはどの病棟？　70歳代の女性と同室だった患者3人の容体は？　濃厚接触者は誰なの？　どこに感染のリスクはあるの？　何から手をつけたらいいの？

3月3日、感染防止対策の徹底のため、大会議室で開かれた緊急の職員集会（南生協病院提供）

病院組織の風通しはよい。職員の意識も高い。災害対応の訓練もこなしてきた。にもかかわらず、23ある部署の管理職に伝達したはずの情報や指示が、なぜか現場に伝わらない。みんなが疑心暗鬼に襲われ、それに必死に耐えている。

病棟からの移動を禁じたのに、家族と面会する患者が出たり、リスクの高い患者に看護師がマスクなしで接したり、徹底したはずのルールも綻びを見せた。

対策チームの感染管理認定看護師、小栗生江さん(50)は早朝から夜まで、鳴りやまない電話に対応した。現場から戻ると、すぐ次のベルが鳴る。「感染の標準予防策は身についている。大丈夫、自信を持って」と呼びかけて回った。

そんな状態が3日まで続く。同日、4人目となる個室の患者の感染が判明した。

組織の土台がぐらついていく。組織が内部から崩れかねない。このままでは感染の防止も不可能？　長田さんも小栗さんも追いつめられた。防護服の着脱手順などの点検や見直し、基本を再確認する緊急の職員集会が開かれた。

入院患者の男性(81)は、看護師の姿が減り、ふだん通っていた廊下が〝封鎖〟されたことをけげんに思った。顔見知りの看護師に「何だろうね」と尋ねても、返答は要領を得ない。

病院は、残った職員が総出で、患者と地域への責任を果たそうとした。3日までの受診予約をしていた600人の患者全員に、電話で休診を伝えた。7日までの患者1700人には郵送で案内。ホームページも、随時更新した。

2日には処方のみの外来を始め、3日は200人以上がつめかけた。

＊過去記事はヨミドクターで

入院患者励ます生協組合

院内感染の防止に挑む南生協病院（名古屋市）には、心強い味方がいた。病院の危機に、母体の南医療生活協同組合が動いた。

「えらいこっちゃ」。入院患者の感染が発表された翌日、3月1日朝。愛知県半田市の杉浦直美さん(57)は、車で病院に向かった。9万2000人いる組合員の一人だ。外来や新規入院が中止になった病院に入っていく、職員の緊迫した表情を目で追った。

他の組合員7人と合流し、「入院患者の立場になりきって」応援できることは何かを相談した。すでに、みんなが病棟からの移動を禁じられている。家族との面会もできない。高齢患者は携帯電話も持っていないはず。病院のなかで殻にこもり、ぐつぐつ煮立っているような状態に違いない。

「クルーズ船の人はつらかったろうな」。一人が、そう口にした。そこにいた全員が、2月、数週間にわたって横浜港に停泊した「ダイヤモンド・プリンセス」の乗客に、入院患者たちの姿を重ねた。

杉浦さんたちは、病院と同じ建物内にある南医療生協本部の「地域ささえあいセンター」と一緒に知恵を出しあい、行動した。

まず、患者にはがき大のメッセージカード300枚を届けた。「夜は必ず明けます　一緒に乗り越えましょう」「こんな時だから笑顔を忘れずに」。院内放送でも励ます言葉を流した。

4日には、患者の注文品を病棟に届けるワゴン販売「よろずや　みなみ」が始まる。アイスクリーム、缶コーヒー、カミソリ、のどあめなどの注文が相次いだ。患者本人の希望を直接書いてもらう「何でも言ってちょカード」も配った。

5日午後3時のおやつの時間。緩和ケア病棟などから見下ろせる屋外に「みんなで支えます」と横断幕を広げた。紅白歌合戦で歌われたヒット曲「パプリカ」を流し、連日、24歳～70歳代の20人近くが曲にあわせて踊った。やがて、病棟の窓に「ありがとう！」と返事が貼られた。

センターは、カラー印刷の「まいにちニュース」を発行し、入院患者全員に配った。地域から、激励のメッセージを書いた画用紙を持つ組合員の写真が続々と届く。そうした声や院内外の動きをニュースの表裏に刷った。患者に「今日の新聞」と頼まれ、日刊紙を持って行くと、まいにちニュースのことだった。

南医療生協には、病院を含め、医療や介護、福祉など66の事業所がある。

ウイルスとの闘いの後、新たな人と人のつながりや信頼が生まれていてほしい。教科書にない世界を示してほしい。それができる組織だと、専務理事の成瀬幸雄さん(67)は信じていた。

病室の患者らを励ますため、「パプリカ」の曲にあわせて踊った南医療生協の組合員たち

病室の窓に掲げられた言葉
（いずれも南生協病院提供）

＊過去記事はヨミドクターで

「見える化」で混乱収拾

南生協病院（名古屋市）で、新型コロナウイルスの感染が確認された外部からの入院患者は、3月4日時点で4人。3人は転院していたが、最初の確認から5日目を迎え、院内の緊張と混乱はピークに達した。

そこからの改善は、まさに急ピッチだった。

感染対策チームがこの日、新たなチームに再編された。通称「CCC」（新型コロナウイルス危機対策会議）。院長ら医師5人、感染管理認定看護師ら看護師4人、事務長、医事課長による、組織一体型の〝実働部隊〟だ。2年目の研修医も加わった。

3階会議室の白壁に、問題点を記した紙が次々と貼られた。組織の現状を「見える化」するためだ。現場の情報や課題を吸い上げ、整理し、即応することが組織維持の生命線だと、みんなが分かっていた。

応援に入った藤田医大病院医療の質管理室長、安田あゆ子さん(48)は、チームが壁の上に大きく掲げた言葉に目を見張った。

現場の問題点を書き出した紙が壁に並ぶCCC（新型コロナウイルス危機対策会議）の様子（南生協病院提供）

＜地域の医療を支える！＞。職員全員の意思と目指すべきゴールが明示されている。この病院は崩れないと、安田さんは思った。

「濃厚接触者」と判断される患者と職員を各病棟でチェックし、名前や位置を一覧表にした。人工呼吸器の挿管に立ちあった人などリスクの高い人とそうでない人を、緑、赤、黄色で色分けすると、どこにどの程度のリスクがあるのかが一目瞭然になった。感染患者の経過も簡潔にまとめた。

情報伝達のルートも変えた。管理部門から23の部署の管理職にメールで流す方式を改め、重要な情報を整理し、院内にいれば職員全員が端末の画面で見られるようにした。さらにCCCのメンバーが各部署に出向いてポイントを説明し、周知をはかる。

いつまでに、誰が誰に何を話し、決めていくのかの作業工程も示した。

指揮命令系統と意思決定プロセスがシンプルになり、情報が末端まで共有されると、組織全体の動きが目に見えて回復した。

作業療法士の梅原尚子さん(40)は、「相談できる場もなく、自暴自棄になっていた」自分に余裕が生まれた、と感じた。感染情報の収集などに費やす時間が短くなり、部外者の立ち入りチェックなど人が足りない仕事の応援に回った。

国立感染症研究所が示す「濃厚接触者」の基準に該当しない職員から順に、職場復帰が始まる。感染の心配のない患者たちの退院も進んでいく。

最悪の事態だけは避けられたと、感染管理認定看護師の小栗生江さん(50)が、ふと思ったのは、CCC設立から20日が過ぎてからのことだった。

＊過去記事はヨミドクターで

地域に情報公開 風評克服

南生協病院（名古屋市）には、新型コロナウイルスと別に、受け止めなければならない相手がいた。地域に広がる「風評」だ。

院内の混乱に歯止めがかかり始めた3月5日、愛知県の大村秀章知事は、記者会見で、南生協病院を「小規模なクラスター（感染集団）」と表現した。その会見を記事にしたある全国紙は、「入院患者が感染した南生協病院」と書いた。

外部で感染した患者4人が入院し、感染の拡大を防ごうと職員が全力を挙げているさなかの明らかな誤り。知事も全国紙も後日、その内容を訂正した。

しかし、「コロナウイルスを〝出した〟病院」という風評が広がる。職員の家族から、悲痛な声があがってきた。「保育園や塾で、職員の子は帰ってほしいと言われた」「校内で他の児童と隔離された」「非感染の証明書を求められた」……。病院への苦情電話も100件を超えた。

こうしたなか、病院は、9日の外来診療再開に向けて動きだした。院内が正常化したとはいいがたく、反対する声もある。それでも、院長の長江浩幸さん(60)は、「正確な情報を伝え、共有すれば、地域は理解してくれる」と考えていた。

患者と職員の安全を担保する具体策について、市保健センターと入念な打ちあわせが続いた。

外来診療の再開を前に、病院は、ホームページで掲載する「地域の皆様」宛ての案内を、院長名で用意した。入院患者は4人以外、誰も感染していない。院内環境の消毒にも努めた。市保健センターから了解を得たことの3点を報告し、Q&A形式で、これまでの経緯や院内の状況、再開を決定した根拠などを分かりやすく説明した。

＜今、いちばん大切なのは、みんなが新型コロナウイルスを防ぐという強い気持ちでつながり（中略）、ひとりひとりが感染の予防に取り組むことです＞とも呼びかけている。

南医療生活協同組合の組合員も、地域の疑心暗鬼を拭いとるために協力した。

生協が毎月5万部発行する機関誌「健康の友」は、9日の外来再開日に号外を刷った。高齢の女性と看護師が会話する様子を写した写真を載せ、「隠さず速やかに情報公開」「風評越え予防に全力」などの見出しが躍る。

大勢のボランティアが集まり、それを全戸に配って、可能な限り手渡しした。まとめ役の松下繁行さん(69)は、「対面で、病院の安心と安全を伝えたかった。配りながら不安や困りごとにも耳を傾けた」と話す。

隠さない、ごまかさない、逃げない――。病院は地域と一緒になって、初めての難局を乗り切っていく。

「健康の友」の号外に掲載された、3月9日、外来診療が再開した日のロビーの光景（南生協病院提供）

＊過去記事はヨミドクターで

みんなが支え 外来再開

3月9日午前8時、南生協病院（名古屋市）は、9日ぶりに外来診療を再開した。入院患者4人の感染が分かったが、ついに院内感染は出さなかった。

戻った患者から、あったかい言葉が返ってきた。

「早く記者会見を開いてくれたので、やっぱりここ（が私の病院）だと安心できた」「看護師さんが何度も電話をくれて、受診日の相談ができた」「ホームページで経過がよく分かったから、別に不安になることもなかったよ」

患者へのメッセージを送った、南医療生協の組合員、斎藤聡子さんと子どもたち（南生協病院提供）

病院ロビーで、検温や問診を徹底し、患者の優先順位を見極める。人手不足は南医療生活協同組合の組合員たちで補う。

16日には、救急外来や新規入院、夜間診療も再開した。感染が疑われる入院患者は、専用の病棟に入る。

CCC（新型コロナウイルス危機対策会議）を率いた副院長の長田芳幸さん(44)には、実は、うまくいったという認識がない。「まさに紙一重だった。感染が広がらなかったのは、幸運でしかない」と言う。

成功の理由をあげるなら、2人目以降の感染者を最初から個室に入れたこと。そして、感染対策チームが、標準予防策の教育を徹底していたことか。「手洗いや清掃、ゴーグルや防護服の着脱などの基本動作がいかに大切だったかを思い知った」と、言葉を継いだ。

緩和ケア病棟の患者たちも家族との面会を制限された。「貴重な時間を寂しく過ごすつらさはいかばかりだったか」と、心を痛める看護師もいる。「仲間がいなければできなかった」と振り返る声も多い。

CCCの応援に入った藤田医大病院医療の質管理室長の安田あゆ子さん(48)は、「立て直しのスピードと、情報を公開する姿勢が素晴らしかった。今後、各地で南生協病院と同じようなケースが起こる可能性もある。患者と職員をいかに守るか。病院組織の力が問われる」と話した。

入院患者たちへのメッセージを送った南医療生協の組合員、斎藤聡子さん(35)は、「病院が地域に向きあっているから、私たちも頑張ろうと思う。それにしても、みんなで応援するってスゴイ」と感じた。

組合員たちは、関連の介護事業所からのSOSを受けて、自宅のガーゼや布をもちより、手縫いやミシンでマスクづくりを始めた。感染防止策の勉強会も、各所で計画されている。

感染拡大と医療崩壊を防ぐため、政府は4月、緊急事態宣言を出し、さらに期間を延長する。愛知県内の感染者は500人に迫ろうとしている。

南生協病院の新型コロナウイルスとの闘いは、まだ終わらない。

（編集委員　鈴木敦秋）

（次は「マインドフルネス」）

コロナ感染の体験談を募集しています。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、はがき（〒100・8055 読売新聞東京本社医療部）、ファクス（03・3217・1960）、メール（iryou@yomiuri.com）のいずれかで医療部までお寄せください。